

12月第1週の礼拝説教

- 日 時：2024年12月1日（日）10：30～11：30 待降節第1主日礼拝
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：マタイによる福音書24章36～44節（新約P48～49）
- 説教題：「その日、その時は、」
- 讃美歌：17（聖なる主の美しさと）
229（いま来たりませ、救いの主イエス、）

今年は、本日から待降節に入ります。しかし教会に集っている私たちは、「待降節」という言葉よりも、なんとなくワクワクするような思いのする「アドベント」という言葉になじんでいます。本日の聖書箇所は、私たちのそのようなあり方に厳しい問いを投げかけている、ということができるように思います。

ところで、私は1970年12月20日日曜日に行われたクリスマス礼拝に洗礼を受けましたから、その年の11月、12月の主の日には礼拝前に受洗準備会をしていただいていた。それまでの私は、全くキリスト教とは無関係の日々を過ごしていましたから、11月の最終日曜日から会堂の前方に、杉の木や柵などで作られた大きな輪の上に赤い蠟燭が建てられている「もの」が天井から吊るされていることに驚きました。共に受洗準備会をしていた二人の方に聞きましたら、彼女たちは私よりもかなり以前から教会の礼拝に出席しておられたので、即座に、「アドベントクランツです」と教えてくれました。その頃でも、世の中では11月末ぐらいからクリスマス商戦になり、いわゆるクリスマスソングが流れていたり街中がきらきら飾り立てられたりと華やかでしたが、「アドベント」という言葉を見聞きしたことはなかったような気がします。そして、受洗準備会の最終回に、アドベントという単語は「到来」を意味するラテン語Adventus（アドベントゥス）から来たもので、「キリストの到来」のことであり、私たちにとっては、主イエス・キリストの降誕と、それと同時に主イエス・キリストの再臨を待ち望む思いを深くして祈りつつ過ごす時である、ということを見せていただいたと記憶しています。その時に取り上げてくださったのが、本日の聖書箇所の少し前に記されているマタイによる福音書24章29節から31節だったと思います。以下のようなみ言葉です。

29 「その苦難の日々の後、たちまち

太陽は暗くなり、

月は光を放たず、

星は空から落ち、

天体は揺り動かされる。

30 そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。31 人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」

けれども、その時の私は旧約聖書を読んだことがなかったので、意味が全く理解できま

せんでした。そのうえ、イエス・キリストの再臨は十字架における救いを完成する時のことであり、十字架において起こった神の裁きと救いが明白に実現する時のことです、と説明されたので、もしかしたら私は変な宗教のところに来てしまったのか、とさえ考えてしまいました。しかし、当時私が住んでいた近所にあるその教会は近くのミッションスクールと関係があると聞いていたので、「大丈夫だろう」と自分自身に言い聞かせながら洗礼を受けたことを思い出しました。

さて、本日の聖書箇所マタイによる福音書24章36節をご覧ください。「その日、その時は、誰も知らない。」と主イエスが語り出しています。「その日」というのは、「メシア」と呼ばれ、「人の子」と呼ばれる救い主が到来する日のことです。主イエスは、天使も主イエスご自身も「その日、その時」を知らないと言っています。なぜなら、救いの完成を実現する時を決定するのは主イエスの父である神の権能に属することだからです。主イエスは神の子として父なる神を完全に信頼しておられますから、救いの完成の時はいつかということも父なる神に委ねているのです。これを言い換えると、救いの完成の時は人間のタイム・スケジュールの中に位置づけることではない、ということです。主イエスの父なる神は、御自分の御心のままに救いの完成の時を定めるのであり、それは神の領域に属することであると、はっきりと断言されています。だからこそ、「その日、その時」が到来するとき、私たち人間がどういう状況にあるのかが問われてくるのです。

主イエスは、続いて37節で記されているように「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである」と語っておられます。創世記の7章、8章、9章を見ますと、ノアは神の命令に従って箱舟を作り、大洪水から自分の家族と動物たちを救い出しました。箱舟とその中にいる動物は神に造られた世界のいわば象徴です。それは大洪水という神の裁きの只中においても滅びませんでした。後に教会は、箱舟を主イエスの体である教会を示すものと考え、教会堂を建設する際、箱舟をイメージして造るようになりました、今日の教会建築でも考慮されることのポイントの一つです。私の東京にある母教会も、私たちが以前おりました仙台の教会も、ノアの箱舟をイメージして新会堂を新築しています。38節で主イエスは「洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた」と言われています。これは、人々がごく普通の日常生活を送っていたということです。そのような中で、神はノアを選び出し、箱舟を造らせその箱舟にノアの家族を乗り込ませました。けれども、近くでそれを見ていたであろう他の人々は、日常生活を中断することなく、むしろノアの家族がおかしなことをしているぐらいにしか思っていなかったことでしょう。「そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気づかなかった」というのです。そして、主イエスは、「人の子が来る場合も、このようである」と語っています。

さらに、主イエスは40節で不思議なことを言われます。「そのとき、畑に二人の男がいれば一人は連れていかれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。」と語られたのです。ノアの洪水の出来事では、箱舟に入ったノアと彼の家族たちは救われ、その他の人々は全滅しました。ところが、主イエスはここでは人々が全滅するとは言われません。また、救われるとか滅びるとかも言っていないのです。二人がいて、一人は連れていかれもう一人は残されるというわけですから、単純に考えると、分離させられるということです。そのように考えてくると、人の子である主イエス・キリストの再臨は、人々が予想しないような時に起こるし、またそのことによって分離が起こるということです。ところで、「裁き」というものの基本的な働きは分けることにある、と聞いたことがあります。聖書では、神との正常な関係である「義」と神との関係の破壊である「罪」とを分けることが常に語られています。それを踏まえると、「一人が連れて行かれ、もう一人は残される」というみ言葉は、どこに連れて行かれるのかとか、どこに残るのかといったことを語っているのではなく、古い罪の人間と新しい義の人間に分離するということを告げていると考えられます。

そのように、具体的に「その日、その時」のことを語られた主イエスは、42節で「だから、目を覚ましていなさい。」と勧められました。「眠り」は日常的には睡眠状態を指していますが、それと同時に死をも意味します。もし今生きている者であっても、眠り込んでしまっているのならそれは死人と同じ状況である、と考えられるのです。しかし、主イエスを救い主と信じる者は、主イエスの十字架の死からの復活において、目を覚ました者、すなわち主イエスの救いの完成に向かって歩む者とされたのだと、聖書は語っているのです。言い換えれば、救いの完成を待ち望む者にされているのです。「だから、目を覚ましていなさい」とは、目を覚ました者にふさわしく救いの完成という望みに向かって生きるように、という勧めなのです。42節では、そのことを「いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。」というのです。もし、あらかじめ主が帰ってくる日が分かるのであれば、私たちはその直前に迎える準備をすればよいわけです。しかし、その日を知らされていないのであれば、主イエスの再臨を待ち望む私たちの全生涯は主の帰りを待ち望むことへと方向づけられるのです。

43節で主イエスは続けてもう一つの譬えを語られています。今度は家の主人が主人公になっています。「家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るのかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせないはしないだろう。」というのです。泥棒は押し入ることを予告しません。家の主人は、泥棒というのは夜家の者が寝静

まっているところに押し入る、ということを知っているのみです。だからいつも目を覚まして備えるのです。44節に、「だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」とあります。ここには「目を覚まして主を待ち望む」ということが、さらに丁寧に言われています。それは、僕であれ主人であれ、主イエスを迎える準備をするということです。なぜなら、主イエスは人間の都合ではなく、御心のままにお出でになるというのですから、そのことをいつも忘れない、それが私たちに示されている「アドベント」の恵みだと思います。主イエス・キリストが到来されるクリスマスを前にして、これからの一日一日を、心を研ぎ澄まして待ち続けることにいたしましょう。